

詩・短歌・俳句の「今」を知る

授業づくりに役立つ本、授業とからめて生徒に読ませたい本などを紹介するリレー連載。今回のご担当は、高橋伸先生（札幌市立向陵中学校教諭）です。



北海道札幌市立向陵中学校教諭
高橋 伸
1964年、北海道生まれ。北海道教育大学札幌校卒業。北海道教育大学附属札幌中学校を経て、札幌市の公立中学校教諭として勤務。

韻文の授業の導入として、お気に入りの小説の作者を生徒に尋ねてみる。宮下奈都、

東野圭吾、瀬尾まいこ、有川浩など、隣りに学級の人数と同じくらいの名前が挙がる。では、詩や短歌や俳句はどうですか、と問うてみる。谷川俊太郎、宮沢賢治、工藤直子あたりでびたりと声が止まる。詩集を買ったことがある生徒はゼロに近い。小説の情報は身近にあふれているが、韻文の情報はなかなか入ってこない。

よく読んでいる小説については「創作して「らん」と言われる機会は滅多にないのに、生徒が短歌や俳句を「作ってみよう」と言われる機会は意外に多い。国語の授業でも作るし、行事が終わった後に作ることもある。そんな折に生徒がこんな俳句を作ったら、

教師はどんなふうに評価するだろう。

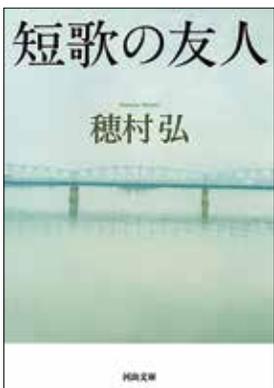
鯉のぼり泳いでいるよかわいいいな

今回紹介する『世界一わかりやすい俳句の授業』では、生徒が作る俳句によく見られるこのような句を「類想類句」と評している。凡人的発想から生まれた、誰もが作りそうな俳句という意味である。

では、どんなふうに投げかけていけば、この句を良くしていけるのだろうか。詳しくは、「二物仕立て」（季語のことだけで俳句を作る）と「取り合わせ」（季語以外の要素も入れて作る）の違いを理解しただけで、生徒自身が俳句を楽しみながら作り変えていくように思う。

今を生きる私たち教師は、現代の小説や随筆を読み、論説や報道などの文章を読んでいる。当然ながら、そのことが国語の授業に役立っているはずだ。けれど、韻文、特に現代の韻文については、はなはだ心許ない知識と読書量で授業を行っているのではと、自戒の念を込めて考える。

授業者である私たちも、意識して韻文に触れる必要がある。そうすれば、今よりもっと、自信をもって生徒たちに向けて授業ができるし、本を紹介することができる。まずは私たちが、現代の韻文を読み、おもしろがったり首をかしたりしながら、韻文に親しんでいこう。今回紹介するのは、そのときの一助になればと選んだものだ。



短歌の友人

穂村 弘 著
河出文庫 / 2011年

短歌をどう読み解くかを、穂村弘が教えてくれる。エッセイでは軽妙な語り口の著者が、古今の短歌を、時に自ら改作した短歌と比較しながら真面目に解説してくれる。授業の導入にクイズとして用いると楽しい。



桜前線開架宣言

Born after 1970 現代短歌日本代表
山田 航 編
左右社 / 2015年

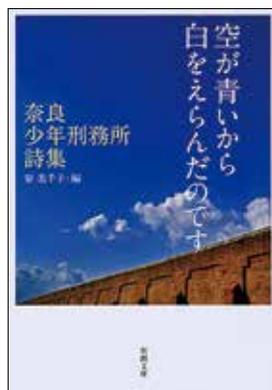
教科書に掲載されている短歌は、1962年生まれの俵万智・穂村弘が一番の若手。本書は副題のとおり、1970年以降に生まれた現代歌人が紹介されている。俳句編の『天の川銀河発電所』も併せて読みたい。



世界一わかりやすい俳句の授業

夏井いつき 著
PHP研究所 / 2018年

俳句を作るときに教えておきたいことが満載。本書に書かれたことが意識されるだけで、生徒の俳句は劇的に良い作品に仕上がるはず。中学校の国語教師だったという筆者の説明が、本当にわかりやすい。



空が青いから白をえらんだのです

奈良少年刑務所詩集
寮 美千子 編
新潮文庫 / 2011年

副題にあるように、奈良少年刑務所での更生教育の一環として作られた詩の数々。思いがそのまま文字になったような作品に、心打たれる。詩の授業の初めに朗読するのもふさわしい。